朝日新聞
2009年(平成21年)
1月14日
水曜日
京都

京の人

農産物で人とのつながりを

「野菜のおすそ分け」利用者増やす

激辛唐辛子ハバネロなどユニークな野菜を生産する篠ファーム(亀岡市)。42歳で脱サラした高田実社長(55)は「商品企画には、花一筋だった過去の経験が生きている」と話す。昨年からは都市部と過疎地を野菜で結ぶ新しい取り組みを始めた。主役は農業のプロである限界集落のお年寄り。「農産物で人のつながりを作りたい」という高田さんが、地域活性化への思いを語った。

(上田明香)

高田 実さん(55)

たかだ・みのる　53年、京都市生まれ。高校の園芸科へ進み、生花店や園芸問屋などで働いた後、大手流通会社へ。スーパーで花を売る仕組みを考案し、北海道から沖縄まで国内78店舗の売り場作りを手がけた。切り花の輸入商社を経て96年に起業。

――園芸に目覚めたのは?

幼稚園のころから花が好きな園芸少年でした。近所で種をもらったヒマワリがきれいに咲き、はまってしまった。園芸会社、花問屋、流通業など、24年間、花に関する仕事をしました。

――独立後、野菜も手がけるように。花とは違いますか?

草が化けて「花」。食べられないから見栄えを良くするためにパッケージを工夫し、五感に訴える。食べられる農産物にも同じようにすれば、おいしい野菜はさらに魅力ある商品になると考えています。

――商品はユニークですね。

どこにもないものにチャレンジしたい。安心、安全にこだわり、嗜好性の高い商品を開発すれば、少し高くてもお客さんは買って満足してくれる。01年に栽培を始めたハバネロは、フィナンシェや調味料などの加工品も次々と開発し、亀岡の特産として定着し始めています。

――そもそもなぜ亀岡で?

以前は成田空港の近くで切り花の輸入に携わっていました。幼稚園に通っていた長男の関東弁を聞き「これはまずい」と関西に戻ることにした。近畿地方の地図を広げ、目を閉じて真ん中辺りを指したら、そこが亀岡だったんです。名物の霧のおかげで霜害も少なく、農業には最高のロケーションです。

――なぜ、限界集落を活性化させようと?

農業所得の確保ももちろんですが、都市部との人的交流を生み出したい、というのが一番です。一筆箋に手書きで言葉を添えて、収穫したての旬の作物を届ける直販制度を府南丹広域振興局の仲立ちで実現しました。京丹波町と南丹市の計3集落のお年寄りが「子や孫に送る気持ち」で出荷するのが、「ふるさと野菜のおすそ分け」。今年の目標は、地産地消のニーズに応え、利用者数をいまの80人から2千人まで増やすことです。